

## 八十路のくり言

中津市 平山 八重子

昭和16年9月22日、召集令状が届いた日、夫は仕事のため中国吉林省へ出張して留守だった。私たちはそのころ、朝鮮半島北部の砂金会社を辞め、満州（現在、中国東北地方）間島省琿春で小さな鉄工所を始めて2箇月たったばかりだった。

夫の留守間、たまたま間島軍家族の引揚げの話を耳にしました。私はさっそく、持って帰るべき荷物をまとめ、夫の帰宅を待った。夫は24日に帰ってきて、私から引揚げの話を聞くと、さっそく始めたばかりの鉄工所の後事を現地の取引会社に託すことにした。

夫は大きなお腹をかかえている私を見て、「途中でパンクしたらどうするのか」と言ったが、私は「その時は、その時よ」と心の内で思い、夫とともに内地へ帰る決心をした。

船が下関に着くと、私の父が迎えにきてくれていた。夫が南京に出発する前の日、折尾の実家で二男が誕生した。

それから半年後、私たち親子は、夫の実家である長崎県五島の奈留島でお世話になることになった。夫の両親はとても心優しい人たちで、若い嫁と幼い孫たちのことを「戦争さえなければ、こんな苦労も……」と慰めてくれた。そのころは、小さな島ゆえ電灯もなく、夜子どもたちを寝かせて、母に按摩をしてあげるのがせめてもの私の感謝の気持ちだった。

2年ほどたった10月、夫が帰ってきて諫早航空隊に所属することになった。その9月、三男が生まれた。

翌年5月、その子が7ヶ月になったとき、夫と北村さんという方が呉の航空隊から備品を受領するよう命を受け、中型練習機「赤トンボ」で行くことになった。出発の朝、私たちは手を振ってその飛行機を見送った。そして夫と北村さんはそれっきり帰ってこなかった。

20年5月14日、本土、四国方面に米軍戦闘機200機余りが3度来襲したそうだが、私たちの乗った「赤トンボ」は運悪くその群の餌食となってしまったようだ。北村さんの奥さんは、そのとき臨月の身体だった。「赤トンボ」が火を吹いた瞬間、機中の2人の胸にはどんな思いが走ったかと思うと、今でも胸がはり裂けそうな気がする。

そんな悲しみの中、私の父もその年の7月、私のことを気に病みながら57才で冥途の客となってしまった。3月にビルマ上空で散った21才になる弟のことも知らないままだった。この弟は父の自慢の息子だったのに……。

8月9日、友たちと近くの山に薪を取りに行き、そろそろお昼近くになったので家に帰ろうと山を下りかけた時、バーンというものすごい音がして、上の方から爆風がザーッと吹きつけてきた。思わず押さえた耳の中がキューンと鳴る。きっと長崎方面に大きな爆弾が落ちたのだらうと、もうもうと立ちこめる砂埃の中で思った。後で思えばそれが原子爆弾だった。

その日の夕方、長崎の空があたかも地獄の業火に焼かれるかのように真っ赤に燃えていた。そしてザラザラした灰が縁側を覆った。近くの道は夜通し長崎から島原方面へ避難する人々で

一杯だったともいう。

長崎に住んでいる夫の妹一家の安否が気遣われたが、赤ん坊連れでは探しにも行けず、後で一家全滅と聞いたときはすまない気持ちで一杯だった。私たちのことをいつも心から心配してくれた義妹だったのに……。

そして8月15日終戦の日が来た。私は夫の写真の前で思いきり声をあげて泣いた。夫が戦死したと聞いた時は声も出さずに泣いたのに、国が負けたと思った時には恥も外聞もなく声を上げて泣いた。『私達はこれから一体どうしたら良いのだろうか』という不安と戸惑いが声になって出たのだと思う。そして、その涙の中で私は「あなたが残してくれたこの子たち、死ぬ気で守り通してみせます」と、亡き夫の霊に誓った。

その後しばらくは、涙に明け、涙に暮れる日々が続いた。それを救ってくれたのは近所の方々の暖かい思いやりだった。親切にも小さな畑を貸していただき、慣れぬ手つきで芋や野菜を作りはじめたころ、少しは元気がでてきたようだった。

子どもたちをつれて、近くの山にツワブキを取りに行ったり、有明の干潟にあげ巻貝を取りに行ったり、思わぬ田舎暮らしの楽しみを味わうこともできた。小さな子どもたちを抱えては働くこともままならず、北高森山村の苦しい生活が3年ほど続いた。

昭和24年、長女が諫早の鎮西学院中学校へ入学した。そのころ、誰一人頼る人もない私を友人の一人が気遣ってくれて、諫早キリスト教会に誘ってくれた。

その教会のある日の説教で、「明日のことを思い患うな。明日はまた明日自身が思い患うであろう。一日の苦労はその日一日だけで十分である」という聖書の一節を聞き、豁然と悟ることがあった。この御言葉に勇気づけられ、その後の苦難の道も乗り越えることができたし、その日その日の神への感謝の気持が今も絶えることなく私の心を支え続けてくれている。

そのころ、幸いなことに娘の通う学院の寮母として、中高生50人のお世話をするという仕事が舞いこんできた。『奥さま暮らししか知らない私にそのような勤めができるかしら』と大いに懸念もあったが、なにしろ生活がかかっている。きついなど言っておれない。思い切ってその仕事をいただくことにした。寮生といっしょに芋を植えたり、配給の粉をパンに換えてもらったりと、食料の少ない時分の献立には随分苦勞もした。

その後10年間寮母をし、次に購買部主任として20年間働き、無事定年を迎えることができた。子ども3人も巣立っていった。福岡に住む二男のすすめで定年後春日市に住むことになった。

そして今、日曜日には近くの教会に行き、アートフラワー造りを楽しみ、古典教室、日本画、お習字と、生涯学習花ざかりの日々を過ごし、感謝一杯の毎日を過している。

悠けくも辿りついた苦難の道、それを支えてくれたのは亡き夫が与えてくれた愛だった。その『大いなる遺産』に感謝しつつ、健康に恵まれながら、月2回の墓参も欠かさずつづけ、夫の墓前で家族の幸せを祈ることがいま無上の喜びである。

そして、私もようやく八十路にさしかかった。夫に逢える日はいつだろうか、道はまだ悠か遠い。